

## 7月12日「いのちの回復」使徒言行録9：36～43

数年前にイスラエルに研修に行く話が持ち上がりました。結局、ガイドがインフルエンザに罹ってしまい、行けずじまいで、このコロナ禍によってさらに遠のいてしまいました（泣）。でも「いつか必ず」と思いその時に購入した『地球の歩き方』は本棚に大事にしまってありました。今日の物語の舞台となったヤッファと言う町は、その本によれば、イスラエルに現存する美しい港街なのだとか。聖書の後ろの地図をご覧くださいますが、ヤッファはイスラエルの国の西側、地中海に面した町で、古くはダビデ王の時代に海外との交易が行われ、続くソロモン王の時代にはエルサレム神殿を建てるためのレバノン杉がこの港を通して運ばれたそうです。イスラエルの国にとって交易の拠点だったのです。ペトロが滞在していたとされている皮なめし職人シモンの家もいまだに残っていますし、今も交易拠点としての機能は生かされていて、1900年代初頭から、離散していたユダヤ人たちの最初の入植地となり、トルコ風の古い街並みと現代的な建築が共存する美しい街が整えられ、現代アートの本場となっているのだそうです。使徒言行録によれば、ペトロは、今日の出来事の後に、ヤッファを拠点にしてエルサレムだけではなく、ローマ世界のさまざまな地域へとイエス様のことを伝えていったようですが、それにも頷けると思います。

さあ、そのヤッファにタビタ（かもしか）と呼ばれる女性の弟子がいました。彼女は多くの愛に満ちた行いをしていました。特に夫を亡くした女性たちのために、着るものや食べ物を分け合い、生活を助けていたようです。ところが、彼女は病にかかって死んでしまったのです。人々は彼女の死を悲しみ、埋葬の準備をして、二階の部屋に寝かせていました。ちょうど、ヤッファの近くの町リダには弟子たちのリーダーであったペトロがいましたので、人々は彼女のためにペトロを呼びに行きました。ペトロが到着すると、女性たちはタビタが与えてくれた着物を見せ、彼女がどれほど愛に満ちた者だったのかを訴えます。そこで、ペトロは人々を部屋の外へと追い出してから「**タビタ起きなさい！**」と言うと、タビタは生き返ったのです。この出来事は町中に広がり、多くの人イエス様を信じるようになりました。

「死人が生き返った」キリスト教を信仰しない人たちが聞けばあまりにもばかばかしく、こんな話を本気で信じているのかと思われるかもしれませんが。また、神さまを信じている私たちにとっても現代の科学と照らし合わせれば受け取り方を考える物語です。一つにこの奇跡の物語をどの程度、現代に通じる奇跡と言って良いのかという面があるかと思います。少し前に「JIN～仁～」というドラマが流行ったことを覚えているでしょうか？現代の医師が江戸時代末期にタイムスリップして、現代の医療技術をもって江戸時代の人たちから見たら「奇跡」としか思えない治療を施しながら、幕末の動乱を生き抜いていくという物語です。そこでは、今では当たり前で使用されている「ペニシリン(抗生剤)」が江戸時代に存在したとしたら、あり得ないほどの効果を発揮しただろうという描写がありました。イエスの時代も平均寿命は30歳、今よりも圧倒的に若くして死ぬ人(特に子ども)が多かった時代です。戦争、病気、栄養失調、公衆衛生、医療環境ありとあらゆるものが今と比べ物にならないくらい不足しています。そんな時代の復活物語ですから、今の医療の感覚ならば十分にあり得ることが、2000年前の感覚であり得ない「奇跡」として描かれていた可能性もあります。例えばイエス様が悪霊に取りつかれた人を癒す話などは精神疾患を患っていた人をイエス様が誠心誠意カウンセリングされる中で回復していったということではないだろうかとは私は思っています(もちろん、字義通り、奇跡が起こったこともあり得ます)。

けれども、そんな議論にはあまり意味がないのかもしれませんが。聖書は出来事そのものよりもその意味を伝えようとする書物です。ですから、この物語でも「どうやって死人が生き返ったか」という方法ではなく、なぜタビタが生き返ったのか？生き返ったことによって何が起きたのか？が聖書の伝えようとするところでしょう。この物語が伝えるのは単なるタビタ個人の回復だけではありません。これは共同体の回復の物語なのです。タビタの死は大きなものでした。彼女の死は彼女の支援していた女性たちの死も意味しました。聖書には社会の中で最も弱く助けを必要とする三つの存在が書かれています。孤児、寡婦、寄留の民(難民)です。当時は男

性中心社会で、現代のように社会保障などありません。夫に先立たれた女性たちの生活の厳しさは今と比べ物にならないくらい大変なものだったでしょう。だからペトロが救ったのはタビタだけではなく、その周囲にいた女性たちを含めた共同体全体でした。そして、タビタの回復によって共同体の命が回復されます。更には、そこにペトロが加わり、当時最も軽蔑されていた職業の一つ、皮なめし職人たちも加わり、共同体は力を増し加えられていきます。そうして、この共同体を拠点として世界中へとイエス様の福音が広がっていくのです。

聖書に現された“いのちの回復”とはそういう面があります。預言者エゼキエルは大国によって滅ぼされ、捕囚されていたイスラエルの「枯れた骨」に神さまの霊が吹き付けると、大きな群衆となって復活する共同体の幻を語ります。イエス様を失って崩れかけていた共同体に、ペンテコステの日に神さまの命の息が吹き入れられると、力強く語る共同体が出来上がっていきます！そして今日のタビタの物語は、やもめや、皮なめし職人、この世界で最も小さくされていた人たちの共同体に復活の命が与えられることによって、この最も小さな人たちのところに、キリストの愛と教えが広がることによって、やがてローマ世界全体を動かす力となっていくことを伝えます。神さまはタビタに導かれる本当に小さな群れを顧みて、いのちを回復させて、全く新しい共同体を誕生させられます。同じように神さまはどれほど小さな群れにも、キリストの愛と命の力を注いで、生まれ変わり、成長するように導かれるのです。

私たちの共同体はどうでしょうか？私たちの共同体にも神さまの霊の風は吹きつけているのでしょうか？教会という組織は“同質性”を求めがちです。いつまでも同じメンバーで同じ讃美歌を歌い、同じ礼拝を守りたい、「変わらない」ことを求めがちです。もちろん、教会には神の普遍の言葉があり、受け継いできた大切な伝統があり、大切な遺産があります。けれども、そこに絶えずキリストの命が注がれ、新しい意味が与えられていなければ、共同体としての成長はなくなり、“教会”はただの“仲良し聖書クラブ”になってしまいます。

少し話が変わりますが、最近、私は大学の授業を受けなおしています。そこで聖書の「解釈学的循環」という言葉が出てきました。大学で聖書を学ぶということは、聖書を現代の学問で通じるように、批判的、客観的に読み直すことです。例えば、今日の物語にあったように「死人の復活」などは現代の科学的知識から批判的に読み直されます。ある意味全く信仰的でない角度から読む作業を一度行うのです。では、読み直したら信仰が失われるのかということそうではない。学問的な研究成果と出会い、今までと異なる読みによって、私たちの聖書の読み方が深められていくのです（深化）。今日もそういった内容を心掛けましたがいかがだったでしょうか？この聖書の「解釈学的循環」は学問だけに留まるものではありません。例えば、今回の世界的なコロナ禍や、大切な人の死、大きな挫折など人生の出来事を通して。愛する人やこれまで出会ったことのないタイプの人との出会いを通して。私たちの聖書の読みはいつも変化し、深められていきます。10代の時に聴く御言葉と高齢になってから聴く御言葉では、同じ御言葉であっても全く違って聞こえると言う経験は皆さんされているのではないのでしょうか？聖書とはそういう書物です。だから私たちは何度も何度も同じ聖書の言葉を聴きます。毎年同じクリスマスの物語を聞き、復活の物語を聞き、ペンテコステの話を知る。けれども全く同じ年は1度だけありません。私たちのいのちというのはそうやって絶えず新しくされているのです。

私たちの教会も決して大きくはありません。地方の小さな群れです。高齢化は進み、なかなか先行きも見えません。とりあえず現状維持、変わらずに立ち続けて欲しいと願う気持ちも分かります。けれども、変わらないことより新しくされることを願いたいと思います。同じメンバーでいることよりも新しい出会いがあることを求めたいと思います。神さまはどのような小さな群れも復活させ、この世界の祝福の源としてくださいます。私たちもこの神さまを信じて、命を注がれ、新しく生きる群れとして歩んでいきたいと願うのです。